中等國語讀本 落合直文編 巻五

375.9
Oc8
資料室

30294
教科書文庫
3
810
41-1902
200030
1971

資料室
375.9
Oc8
廣島大學圖書之印
廣島大學圖書之印
廣島大學教
33962

賀川正之

中等國語讀本卷五目次

一、江戸……一
二、河原院の舊跡……四
三、旅況の古今……七
四、春の巴里その一……一四
五、春の巴里その二……一九
六、春興（今樣）……二四
七、閑日月（短歌）……二四
八、高山彦九郎……二六

△九、汽車乘客論……三四
一〇、公共心……四六
一一、スエズ開鑿始末その一……四八
一二、スエズ開鑿始末その二……五三
一三、ポートセッドより友人に寄する書……五七
一四、二樣の生活……六一
一五、音樂と風俗……六六
一六、都會と幼稚園……六八
一七、明日……七四
一八、座右の銘……七七

一九、十七文字（俳句）……七七
二〇、國語と愛國心……七八
二一、國語國文の變遷……八六
二二、德川光圀……九二
二三、文貞公の事蹟……九九
二四、武將の文事……一〇三
二五、夏夜（今樣）……一〇六
△二六、鹽原……一〇七
△二七、ナイヤガラ瀑布の記……一一三
二八、コロンブスその一……一一九

二九、コロンブスその二……一二五
三〇、コロンブスその三……一三〇

東京大學圖書之印

中等國語讀本卷五

一、江戸

江戸は、今は、東京とこそいへ、昔は、月影の「草より出でて、草にこそ入れ」と、歌へるばかり、廣く遙けき武藏野の末にして、町は、かぎりもなく廣き野原に續き、東の入海は、廻りて、遠く、陸の間に入りこみしを、長き年月ふる間には、野も、かたはしより、田畠に開けしなるべく、海も、川水にたし流されたる砂に埋められて、洲

は、陸に續き、淵は、島と變りつゝ、幾千度、そのさま、かはりつらむも、はかられず。

江戸の城は、康正二年に、上杉定正の家老なりし、太田持資入道道灌の築けるなり。道灌の、この城つくりし頃は、城のまぢかくまで、船、漕ぎ寄すべかりきとぞ。天正十八年、德川家康公、この地の便よきことを見定めて、移り居られしより、賑しき都とはなれり。されど、この頃の事を志るせる書によれば、城より東は、葭のみ茂れる潮入にして、諸士の第に、割り渡すべき地は、十町に足らず。かくては、大名の城下にはなるまじと、

いひつる者さへありしよし、見えたれば、その開けざりしさま、れしはかられぬべし。

家康公は、道灌の築きし城を、本丸とし、四方の石垣も、湟も、修めかへられて、大城となし整へられき。さて、四方の海の波穏に、吹く風も、枝を鳴らさぬ御代となりにしより、出で入る人も、移り住む人も、年毎に、數まさるにつけて、神田山も崩され、下谷沼も埋められ、淺草は、隅田の川口より、程遠き川上となりて、今は、海苔の名に、古の形見を遺せるのみ。されば、貴人のきらびやかなる第のあたりは、狐狸の隱れし、叢の跡にして、

商人のうるはしき家の下は、鯉鮒の潛みたる淵なりしを、さりとも知る者なきばかり、うち開けたるは、いとも、めでたきことになむ。（佐野常民文稿）

二、河原院の舊跡

河原の院の舊跡は、「六條坊門の南、萬里小路の東八町」と、拾芥抄に見えたり。すべて、朱雀より、京極にいたりて、十六町なれば、萬里小路より、富小路をへて、京極までは、三町にして、その東は、たゞちに、鴨河なり。さてぞ、河原をもて、殿の名に呼びて、園の内に、流をとりこめ、東の岸のかなたまで、占め給ひしなりけむ。五條の南の河中に、鏈が島の跡といふところあるも、その名殘なりけり。西は、今、富小路より、高倉に及びて、鹽竈の町と稱ふ。高倉は、うしろにせまりたる町なれば、この名の及べるにこそ。

抑も、この殿の風流は、古今に、たぐひきこえず。かの伊勢物語にいへる如く、わが御門六十餘國の内に、陸奥の千賀の鹽竈に似たるところなしとときこしめして、やがて、その景色をうつし、難波より、潮をさへ運ばせて、池に湛へ、海の魚貝を栖ましめ、その潮をも燒か

せて、慰み給ひぬとかや。在五中將の、「鹽竈に、いつか來にけむ」と、よみ給へるを始めて、やゝ、後のものなれど、源順博士の賦にも、種々、いひつゞけられたり。この君、かくれ給へる秋、うちつけに、淋しくもあるか」と、近院の大臣の歎き給ひけむは、さる事にて、「君まさで、烟絶えにしと、貫之ぬしの、昔を訪はれけむも、悲し。千歳の後の今、なほ、このわたりの朝食、夕食の煙にも、その面影うかび、高瀬の舟の往きかふにも、昔の綱手、うちはへて忍ばれぬ。

長坂長泰生、この萬里小路わたりに住みて、このゆゑよし記さむ事を需められど、「さしも、名だたる人々の言の葉どもにつきて、今更に、いふべきふしもなければ、たゞ、その境のあらましをのみ、見出づるまゝに、ふるしつけつ。

名ばかりを、ふるき昔の、形見にて、
くまぬ藻ぞほに、袖ぞぬれける。

（伴蒿蹊著閑田文草）

三、旅況の古今

嘉永年間、德川氏へ、將軍宣下の勅使として、京都より下されたりし、公卿の中に、

君が代は、うまやうまやに、旅寢して、
くさのまくらも、知らで來にけり。

と、詠まれたる和歌あり。わが國、近時の旅店は、衾帳より、飲食にいたるまで、一も闕くるところなきは、この和歌にて、あきらかならむ。この頃、肥後の竹添井井の棧雲峽雨日記とて、支那にありし時、北京より、蜀に遊びたる、紀行の草稿を見しに、その長安に至りし條にいはく、「凡、禹城客店、獨僦臥房、而無他具、故行旅者、必齎枕席衾裯、始得涉遠、北地又無廁竇、人皆矢於豚柵、豚常以矢爲食、瘦削露骨、有上柵者、輒來群於後、驅之不去、殆

使人困、此地始有廁竇之設、不潔淨亦勝無矣」と、見えたり。支那の旅況、これを、わが國の今日に比ぶれば、實に、困しといふべきなり。顧ふに、世の、いまだ、開けざりし時に當りては、いづれの國か然らざらむ。

わが國も、往時は、これに類せしこと、多かり。日本武尊は、皇子なり。その尾張の國に留り給ひし日、劍を桑樹に懸けて、厠に上られたること、史に明なり。降りて、德川氏の始に至りても、將軍秀忠、夜、厠に上りて、刺客の麥隴中よりきたり窺ふを見きといへば、その狀も知られなむ。然れども、わが國、古より、矢を以て、田に糞

ふ故に、家として、厠竇の設なきはなかりき。たゞ、飲食衾褥の不便にいたりては、全く、支那に異らざりしなり。啻に、このことの、支那に異らざりしのみにあらず、甚しきにいたりては、旅店だにあることなかりき。これ、その往時、旅を以て、草枕と稱せし所以なり。古歌にいはずや、

「家にあれば、笥にもる飯を、くさ枕、
たびにしあれば、椎の葉にもる。」

と。飲食も、また、これに準ず。故に、軍防令には、兵士をして、人毎に、糒六斗を儲へしむといひ、伊勢物語には、涙を、糒の上に落すといひ、太平記には、饂飩を進むといへる、皆、これ、支那の「適千里者、三月聚糧」と、いふと、その趣を同じくするにあらずや。

柳庵雜筆に、木曾の贄川驛の一旅店にありし、慶長年間の宿帳といふものを、載せたり。

御糒、ほとばし過し申さゞる樣、念入れ申すべく候ふ。夜の物、御先觸に御書入なき分は、啶と、御受合申さず候ふ。

又、令條記に、寛永三年五月、將軍上洛の時、路次中、宿賃御定書といふものを、載せたり。

人に四文、馬に八文。但し、自分、薪燒き候はゞ、人に二文、馬に四文。馬屋も、これなく、自分、薪燒き候はゞ、二文。馬屋は、これなくとも、亭主の薪に候はゞ、四文たるべし。京にては、馬屋、これなく、外に繫ぎ、自分の薪、二十四文の事。

それ、慶長より、寛永にいたるにれよびては、世も、また、やうやく、開けて、その旅況も、往時と同じからざるべきを、行旅は、猶、糧を齎し、旅店を儲り、湯を請ひ、糒を食ひて、寢るにとゞまり、いはゆる、木賃にて、僧ふに、薪の價のみを以てせしなり。若し、旅客、自ら、糒を漬すを煩しく思ひ、これを、旅店に託すれば、その漬すこと、度を過さしめて、竊むものありしを以て、ほとばし過さずといふ語を、載せたるなり。

余、幼時、これを、故老に聞く。その言に曰く、「昔は諸國修行と稱する者、必ず、鍋と米とを齎し、至るところ、山野に露宿して、未だ、嘗て、逆旅に就かず。今、劇場にて、宮本武藏に扮する者、必ず、横ざまに、一包を負ふ。これ、その飯を炊ぎし鍋なり。昌平、日、久しくして、僅に、その遺風を存する者、獨、世のいはゆる、六十六部といふものの、のみ」と。果して、聞く所の如くならば、我が國も、また、二

百年前の旅況、必ずしも、支那と異るところあらざりしならむ。嗚呼、古を尚びて、今を鄙むるは、學者の通患のみ。飯は、椎の葉に盛りて、食し、枕は、草を結びて、これに代ふるも、また、以て、尚ぶべしとなすか。余は、願はざるなり。（那珂通高文稿洋々社談抄錄）

四、春の巴里　その一

花開き鳥囀る陽春の頃は、人の心も浮きたちて、外がちなるは、東西の別あるべくもあらず。パークの祭過ぎて後は、春氣、俄に、迫れるこゝちして、昨日まで、寒げに見えし處々の噴水も、今日は、ぬるみて、その飛沫の末の、霞にまがひぬるも、のどけし。並木の、青々と芽を含みたるが、何丁となく、うち續きて、うち見る末の、細く丸く、緑門のやうなるに、馬車どもの、引き連ねられて、馳せ行くさまなど、畫のやうなり。

人の樂むべきは、この頃なり。人の遊ぶべきは、昨日今日なり。その行の、狂言じみてをかしきも、この時は、咎めず。その言の、まめ立たずして、人の顰を解くも、この頃は、怪まず。

各劇場は、常に、開かれて、混雑する中にも、春は、一し

ほ、盛なり。されば、オペラの前には、騎兵のたゞずまぬ日もなく、花瓦斯の消ゆる夜もなし。舞踏は、さまざまの組合にて、處々に、催され、假裝會、また、時々、行はる。

婚禮を擧ぐるも、春に多しと聞く。げにや、大路小路往きかふ馬車どもの中に、一きは目立ちて、花もて飾られたるは、即ち、この新夫婦の、或は、寺に行き、或は、家に行くものにして、艶なる見ものなり。やゝ、富豪の徒なるは、さながら、花車の如し。

各公園の中に、最も、大なるは、ボアーといふ處なり。はじめて、その中に入れるものは、出口を失ひて、饑渴

するものも少からずといふ。こゝには、大なる池ありて、あまたの遊客、ボートレースなどするに、鶩鳥、鶴などの戯れかゝれる、かの、古の文王の囿もかくやとさへ思はる。瀧どもの多き中に、湯をさへに落せる、異樣ならずやは。一賭、萬金に價する競馬は、こゝの奥にて行はるゝが、見物人、山の如く、その狀、狂するが如し。

花は、植ゑられて、或は、モサイック風に、或は、天然のまに、各、その專門家の意匠によりて、そだてられたるものなれば、見るに飽くことなし。すべて、花は、室にて咲かせたるを、各公園、さては、道の邊に、壇を築きて、移

し植うることなれば、四時の區別なきやうなれど、春は、一ちほ、色香をますのみならず、その種類も多ければ、目もあやに、うつくしきこと、えもいはず。

この頃は、躑躅、紫陽花、野菊、菫、水仙、釣鐘草など、御國にて見馴れたるも多し。その道の人の話に、「日本ばかり、花の種類多きはあらじ。この品も、日本なり、かの花も、日本なり」と、聞くに、いかで、恐び出づる事なからむ。そが中にも、菊と躑躅とは、ことに、歐洲の人士に、もてはやさるゝも、めでたし。ある時、花の市ありしに、蘭の一ふさを、三千法にて買ひ取り、一夕の樂に費しゝ人

あり。かゝるさまなれば、よき花を造り出でたるものは、一攫千金を得ること、さして、難事にあらずとぞ。

五、春の巴里 その二

繪畫、彫刻の博覽會は、このごろ、シャンドマルスに開かれたり。繪畫は、二千餘點に達し、彫刻は、三百餘點と數へらる。いづれも、當世知名の人々の刀筆になれり。場内の廣さは、我が上野博物館の敷地位はあるべきか。鐵骨玻璃張の建物なり。彫刻の大なるは、五六間以上なるあり。繪畫の大なるは、七八間に亘れり。歴史、風

作文教材

俗、肖像、景色など、さまざまに、書きわけたる、一日二日にては、見盡すべくもあらず。場内に、料理店あり。休息所あり。こは、巴里サロンといひて、我が美術展覽會の如く、私立のものながら、その規模の大なる、その結構の盛なる、たゞ、驚く外なし。集る人々は、老若男女、日々に、幾萬といふ。

日影うらゝかなる公園に、小兒などの、數多遊べる、いと愛らし。或は、象に乘り、或は、駝鳥に車曳かせつゝ、ゆきかふなど、めづらし。殊に、盛砂などある處によりきて、彼の小さき手して、掬ひ上げては、下し、下しては、

すくひ上げして、何心なく、うち遊べるに、母なる人が、子守がてら、縫物せむとて、その物とり出すを、やがて、邪魔しつゝ、あまえかゝれるなど、西も東も、罪なきは、小兒なり。

金曜日は慎み、木曜日は遊ぶは、耶蘇教國の習なり。さるは、一は死し、一は蘇生せし日なればなり。慎む日には、肉を食はず、遊ぶべき日には、大方、郊外に出づるが、五月十一日は、その本日なりしかば、汽車汽船の割引などさへ行はれて、ことに、賑へり。富める人は、いふにも及ばず、貧しきものといへども、パンと葡萄酒と

を携へ行き、芝生の上にて、飲食して、日を送るよ。

いつもあることながら、春になりて、殊に多きは、コンミニヨンといふことなり。これは、男女十二歳に達すれば、寺に行きて、聖餐を受くる儀なり。男は、黑服にて白襟、女は、悉く、白裝にて、頭髪にも、白布を蒙れり。かくて、一家、及び、親戚に連れられて、式に赴く、そのさま、殊勝なり。昨日今日、大路小路を歩くに、この者に逢ふこと、數を知らず。こゝに、又、奇怪なる話あり。そは、五月五日、太陽、凱旋門の中央に沒すといふことなり。こは、プラスドラコンコルドより、夕日を見て、いひはじめしことなるが、その本は、この日は、即ち、ナポレオン第一世が身まかりし日なればなり。これ、我が國の西鄕星などいふ類にして、英雄崇拜の名殘、いとゆかし。

木の花は、桐、梨、林檎、その外、名を知らざるものにて、めでたきもあれど、御國の櫻に勝れるものはなし。並木のマルニエーといへるは、この頃、盛なれども、こは、花を賞すべきものにあらず、その葉の青々として、水の滴るゝが如きが、めでたきなり。この國人は、「日本には、春なし」と、いへるが、かく、並木の青々と葉の美しきを見れば、何となく、花の散りたるが如き心ちせられ

て、こゝには、春なきやうにも、思はれたり。（池邊義象著佛國風俗問答）

六、春興（本居豐穎詠）

きのふはひがし、けふは西、
うかれごころの、花ざかり、
ゆめかうつゝか、飛ぶ蝶も、
霞に醉ひてぞ、舞ひあそぶ。

七、閑日月

① 源義家

吹く風を、なこその關と、れもへども、
みちもせにちる、山ざくらかな。

② 源頼政

みやま木の、その梢とも、見えざりし、
さくらは花に、あらはれにけり。

③ 平忠度

行きくれて、木の下かげを、宿とせば、
花やこよひの、あるじならまし。

④ 蒲生氏郷

限あれば、吹かねど花は、ちるものを、
こゝろみじかき、春のやまかぜ。

伊達政宗

(ナ)

れなじくば、あかぬ心に、まかせつゝ、
ちらさで花を、見るよしもがな。

八、高山彦九郎

彦九郎は、上野新田の人なり。余が、二十ばかりの時、來りて一宿せり。この人、鼻高く、目深く、口廣く、丈高くして、總髪なり。常に、勤王の志あつく、歷代天皇の御諱、

及び、山陵の如き、諳記して、一も誤らず。談、たまたま、王室の衰へしことに至れば、かならず、流涕せり。六十餘國を遊觀せむと、四方をうちめぐりしが、その間の奇事偉行、すくなからず。

ある時、備前の閑谷の學校に宿して、その學制規約などを尋ねしに、教授の人、本一册をいだして示したり。翌朝、はやく、かの寢室に行きて見れば、彦九郎は、明くるも知らで、燈に對して、その本を寫し居たり。猶、半枚ばかり殘れるを、やがて、寫し終へしが、すべて、五十葉ばかりの寫本なりきとなむ。

それより、播磨に赴き、姫路の北郊に、相識の人ありて一宿す。あくる日の夕つかた、暇を乞ひて、出でむとするを、主人、とゞめて、「時は、節季なり、日は、くれかゝれり、明朝、立たれよ」と、いひしに、「これより、但馬に行き、年内に京へ出でて、内侍所の御神樂を聞かむと思へり。日數かぎりあれば」とて、強ひて、出でたちぬ。さて、その翌春、かの北郊の百姓の、罪ありて、獄に下されしものが、赦されて、歸り來れり。その者、獄中の事どもを語る中に、同じ獄に、一人の山賊あり、種々の話の末に、「山賊をなして、深山に夜をあかしたらむには、たそろしき

獣などにもあひしならむ、又、天狗などいふ者をも見しならむ」と、問ひしに、賊の曰く、「十餘年、山に棲みて、一度も、たそろしき者を見ず、唯、一度、これありき。去年某月某夜、某の山中にたゞずみて、人を待ちしに、大なる男一人出で來るを見て、吾等四人、たちふさがりて、酒錢を乞ひしに、その人、大音にて、「慮外者め」と、叱りて、傍に人なきが如く、ふづつふづとして、過ぎ行きしかば、四人は、たのたの、あきれて、ふばらくは、物もいはざりき。その聲の大きさ、山に響き、跡を見かへりし眼光りて、たそろしきこと、かぎりなかりき。これこそ、天狗など

いふものにてもありつらめ」とぞ、いひしといふ。この事を、かの主人聞きて、月日を數へ、「その時刻と、その土地とを考ふるに、その人は、必ず、彦九郎ならむ。かの山中を、節季の夜半に、一人過ぐる人、外には、よもあらじ」とて、舌を巻きたりとぞ。

また、彦九郎、江戸にありし時、新田のあたりに、百姓一揆起りぬ。かくと聞くや、取るものも取りあへず、路程二十里あまり、夜道をいとはず、馳せつきしが、一揆は、既に、をさまりしかば、その夜、また、直に、江戸にかへれりとか。賴萬四郎、そのころ、江戸にありて、くはしく、

その事を知り、この輩、亂世にあらば、一方に向ひて、必ず、大功を立つべしと、時々、かたりて嘆稱せり。

さて、その地に偉人あれば、村吏などの惡むこと、いづかたも、れなじことなるが、彦九郎が鄕里は、ある旗本の領地なり。その名主、年寄などいふ者、いかにいひいれしか、ある時、領主の邸へ呼ばれ、百姓にて、平生、長き大小を横へ、家業をつとめず、書物のみ讀むは、不審の者とて、數月の間、門側の一室にとこめられしが、懇意の朋友、酒肴を携へ、訪ひ來るもの、虛日なし。ある日、大府の一有司の邸に召されて、「その方、何故に、諸國

を遊行し、名ある人を尋ね行くか、仔細あるべし、一々申し上げよ」と、命ぜられければ、彦九郎、「亂世には、武者修行といふ事の候ふよし承り候ふ。今、太平の御世に候へば、諸國に名ある人を捜し求めて、よき事を聞かむとするにて候ふ。そのよき事と申すも、忠孝の事より外にては候はず」と、申しければ、「さらば、この書を講釋せよ」と、論語を、一卷いだされけるに、彦九郎、ちつとも臆せず、辯舌あざやかに、講說しけるによりて、また、もとの領主の邸にぞ下げられける。かくて、數日ありて、又、かの有司の邸に召されて、講釋せしめらる。その

をりに、次の間に、人ありて、その說を書きとめたりといふ。その後、又、數日ありて、召しいだされて、名字を名のり、大小を帶し、諸國遊歷する事、くるしからざる旨、達せられけり。

それより、年を經て、薩摩に遊びしが、歸途、久留米の某が家に宿りて、腹切りてうせぬ。人、その故を知らず。或人の話に、「村吏の誣ひし事も、何の咎もなく免されしは、某侯の當途の時なり。その後、かの侯、職を辭し給ひければ、その身も、便なき事に思ひて、失せにけるにや」と、いふ。されど、そは、命を棄つべき程の事にもあら

ざれば、他に、なにか、深き仔細のありし事ならむ。猶、この人の事につき、聞き及びし事もあれど、よくも覺えざれば、志るさず。（菅茶山著筆のすさび）

九、汽車乘客論

わが國の鐵道線路も、はや、四千哩に近く、東北、青森灣より、西南、長崎港まで、僅に、馬關の一衣帶水を除けば、連絡ある汽車旅行の、差支なきを見るに及びぬ。明治三十二年度にをける、乘客總數、一億二百二十六萬人にして、實に、人口の二倍に超えたり。されば、鐵道生活は、はや、わが國民の生活の幾分を占めたるものにして、その多少の差異こそあれ、何人も、一年、もしくは、一生の幾時間を、汽車旅行に、暮さゞるものなきに至れり。

或は、毎月、幾たびとなく、東海道鐵道を上下するものあり。或は、山陽鐵道に、或は、日本鐵道に、その毎月の幾日、もしくは、毎年の幾日を暮らすものあり。もし、それ、須磨、明石より神戸、大阪に、大磯、鎌倉、逗子より横濱に、大森、品川より東京に通勤する人の如きは、今、こゝに、精確の數を見出す能はずといへども、今日にれい

て、頗る、多きを見れば、今後、ますます、増加すべきは明なり。即ち、汽車内の生活は、三度の食事と共に、殆ど、缺くべからず、避くべからざる生活の部分となるべし。さては、いかに、汽車内の生活をして、便利に、愉快に、かつ、高尚ならしむべきかを講究するは、今日にれいて、必ずしも、等閑の業にあらざるべし。

汽車に乗り込む前に、二箇の難塲あり。第一は、切符を買ふことなり。第二は、買ひたる切符を、役員に示し、これを、鋏ましめて、プラットホームに進むことなり。いづれも、混雑甚しく、老人、小供、婦人などは、頗る、困難を感ずるなり。その混雑の、最も、重なる原因は、後者が、前者を推し除けて、進まむとするにあり。もし、乗客、相互に、その秩序を守らば、幾千百人あるも、決して、狼藉の事なかるべきなり。

かつ、切符を買ふにも、自分の都合と共に、他人の都合をも慮るべきは、勿論なり。さるに、五圓紙幣を出して、東京より品川までの切符を求むるもあり。これ等は、切符賣捌所を、兩替屋となすものにあらずや。余は、この頃、五厘銅貨にて、切符を購ひつゝある者を見たり。買ふ方にて、切符賣捌口を占領し、悠々として、一箇

づつ數へ、而して、賣る方にれいても、また、一箇づつ數へ、その間、幾分幾秒なるを知らず。他客の迷惑、知るべきなり。なるべく、輕便に辨じ得るべき用意をなして、切符を求むることは、汽車乘客の忘るべからざることなり。もし、その購求する代價の全數たらざるも、せめては、これに、接近するものたらしめよ。

汽車の内に入りて、最も、奇異の感をなすは、手荷物の澤山あること、これなり。英人の諺に、「家屋を除けば、何物にても、手荷物たらざるはなし」と、いふは、荷物車に託するものにして、持主と同室する手荷物のことには、あらず。さるに、わが國にては、棚に上げ、腰掛の下に入れ、或は、腰掛と腰掛との間にれき、甚しきは、腰掛の上に置くものさへあり。元來、客車は、人の乘るべきものにして、荷物を積むべきものにあらず。その止むを得ざる手廻の外の物までも、車内に持ち込むなど、不當のきはみにあらずや。

車内は、一種の協同生活にして、乘客、相互に、自他の快樂、すくなくとも、便宜を計るべき義務あるなり。さるに、やゝもすれば、眼中、人なきが如き擧動をなすもの多きは、何ぞや。余は、必ずしも、車内の光景を以て、非

禮の共進會といはず。されど、その殺風景、實に、默し難きものあり。或は、喫煙して、その煙を、他人の顏に吹きかけ、その灰を、他人の衣にれとして、更に、怪まざるものあり。或は、膝、もしくは、股をあらはし、靦として、顧みざるものあり。或は、夜行、又は、長途の汽車にもあらざるに、横臥して、その泥靴を、他人の前に伸ばすものあり。或は、車中に、婦人のあるにもかゝはらず、その衣服をあらたむるなど、けしからぬ振舞をなすものあり。或は、その仲間の多數なるにまかせて、他人を凌辱するが如き態度をなすものあり。ことに、相手をも構はず、醜藝なることを、高聲にて語るが如き怪事の、二等、一等の乘客中に、少からざるは、余が、頗る、わが國風の反射として、慨嘆するところなり。

婦人、老人、子供の如きは、社會協同保護の下に立つべき者にして、彼等は、これを、社會に向ひて、要請する權利なしとするも、社會は、これを、保護すべき義務あるなり。さるに、車内にありて、余の、をばをば、經驗するところは、大に、その趣をことにせり。かの壯夫が、雙腕を左右に張り、而して、その側に、婦人、老人、子供の、席を得ずして、立ちつゝあるも、更に顧みざるが如きは、何

ぞや。

これは、まだしもの事なり。甚しきは、その側に、大なる荷物を横へ、一人前、もしくは、二人前の坐を塞ぎて、毫も、知らざる風をなすものあり。たまたま、他客の哀願するによりて、已むを得ず、その荷物の幾分を推し退け、僅に、膝を容るべき地を讓るものあり。彼等とても、一人前の切符より外は、もたざるに、他人を立たしめて、たのれは、荷物と共に坐するなど、いかに、先取權あるにもせよ、隨分、横着といはざるを得ず。猶、甚しきは、他人の哀願するにも關せず、平氣にてすまし居り、

役員の命によりて、漸く、これを聽くものあり。かくの如きは、社會的感情の上よりすれば、全く、死人も同樣なり。彼等は、必ずしも、惡意あるがためにあらず、たゞ、自個の都合のみを知りて、他人の都合を慮るに及ばざるのみ。即ち、社會的感情の素養を缺くによるのみ。

余の、實見したるところによれば、ある日、國府津、東京間の汽車にれいて、一個の紳士、途中より乘車せる婦人のために、自ら起ちて、坐を讓れり。彼は、その婦人を立たしむるに忍びざればなり。さるに、思ひきや、その席に坐したるは、婦人にはあらずして、その同行者

たる十七八の少年ならむとは。少年、何者ぞ、その婦人の子なるか、親戚なるか、彼は、何の挨拶もせず、傲然として、これを占めたり。これ、實に、珍しき現象といふべきなり。

惟ふに、以上開陳したるところは、その黑き半面のみならむ。わが國民のすべてが、かくの如き非禮の國民たらず、不行儀の國民たらざるは、殊更に、吾人の辨解を要せざるなり。たゞ、協同生活の興味は、わが國民にれいて、未だ、深きを感ぜず、社會的感情の妙趣は、わが國民にれいて、未だ、濃かならず。かの、汽車の旅行の

殺風景なる如きも、固より、さる事にて、深く、咎むべきにあらざるべしといへども、これをして、便宜あり、愉快あり、かつ、高尚ならしむるは、所謂、國民的生活の上にれいて、また、少補なしとせむや。

これを聞く、佛人の、汽車より下るゝ時は、他の乘客に會釋するも、その扉を鎖さずして、去るもの多く、英人の、汽車より下るゝ時は、他の乘客に挨拶せざるも、自ら、扉を鎖して、去るもの多しと。凡そ、國風の眞相は、かくの如き、機微の際にあらはるゝものとせば、わが國民たるもの、それ、豈に、機微の點にれいて、愼戒する

ところなくして可ならむや。（德富猪一郎文稿抄錄）

一〇、公共心

たよそ。共有に係るものは、一個人に、直接の關係を有することすくなきをもて、人、やゝもすれば、これを蔑視し、損傷破毀をもて、多く、意に介せざるものあり。これ、畢竟、その人に、公共心なきが致すところなり。既に、一個人の財産の、侵害すべからざるを知らば、何ぞ、一個人の團體たる社會の事物の、更に、貴重すべきものなるを悟らざる。人の、一紙半錢に觸るゝをたそるるものにして、かへりて、白日、公共の事物を凌慢するを、意とせざるものあり。たとへば、學校の生徒にして、その校の家屋、器械を汚染し、または、破壞して顧みず、或は、公園、道路の樹木を截伐して怪まず、或は、神社、佛閣にいたり、その石燈を倒して、快と呼ぶものあり。これ、わが邦の社會に、屢、見るところにして、ふかく、慨嘆すべきところなり。西洋にては、公共の財産を尊重する念慮、普く、各人の頭腦に浸潤し、敢て、これを毀損するものなし。公園の椅子のごときも、その背に、「各人は、その共有の財産を保護する責あり」と、書き示しある

のみ。これ、かの邦の美風にして、わが邦人の、須らく、則るべきところなり。げだし、國民公共心の多少は、その公共の事物を尊重する程度によりて、測知することを得べし。公園の一石一木は、多く、社會の利害に關せずといへども、これを、尊重する念慮なきことは、すなはち、その人の、公共心の缺乏を示すものなるがゆゑに、社會國家のために、大に、憂ふべきなり。（井上哲次郎著倫理教科書）

一一、スエズ開鑿始末その一

スエズの開鑿は、佛國の學士レセップス氏が、多年の苦慮を費して、成功したる、希有の偉業なり。

そもそも、地中海と紅海とは、この百英里の地峽によりて、阻絶せられ、歐亞弗三洲の交易、これがために妨げられしこと、こゝに、幾千年なりしぞ。されば、いにしへより、この障碍を除きて、交通の便を開かむことを謀りたるもの、その幾人なりしを知らず。されど、遂に、成功の運に向ひたるものあることなし。

今を去る、凡そ、三千年前、埃及國の盛なるにあたり、嘗て、一の河道を開きて、漕舟を通ぜしことあり。紀元

前四百年代、希臘の埃及を併有するにおよび、その河道を修治したりき。その後、羅馬衰へ、亞剌比亞の回部の、埃及を侵取せしをり、又、河道修治の擧ありき。この數代の間に開修せし河道は、時に從ひて、多少の變遷なきにあらざりしかど、大かた、ナイル河を溯りて、紅海の西岸に出づるものにして、河道、甚だ、長く、かつ、その幅、狹きを以て、大船を出入せしむるに足らざりき。

一千八百年代のはじめ、佛帝ナポレオン第一世の、埃及を征服する時、この地峽を開鑿して、運河を通ぜむことを企て、地勢を測量せしめしに、兩海潮面の高低、その差、百メートルにして、開鑿するも、その功なかるべしとの議ありしかば、遂に、その企もやみぬ。

その後、埃及王アリーは、みづから、開鑿の事を企て、英佛兩國に向ひて、地理學に精通せる學者を派遣せられむことを乞へり。佛國は、直に、承諾せしかど、英國の異議ありて、議、いまだ、決せざるに、王は、中途にして崩ぜり。ついで、イスメール王立ちぬ。王は、佛國に遊學せしことありて、深く、彼の國の文化に感じ居たりければ、卽位の後、大學士數人を、顧問として、佛國より招聘せり。レセップスは、實に、その一人なり。

レセップスは、かつて、總領事として、埃及にありしことあり。よく、國内の地勢を知り居しかば、おばおば、王に向ひ、「富國の道、この地峽を開くより、よきはなし。これ、ひとり、一國の利に止らず、地球上の諸國、みな、その恩惠に浴すべきなり」との旨を、反覆せしが、王、遂に、決意するところあり、いかなる障碍あるも、決して、中絶せざらむ事を盟へり。レセップス、感激、措くこと能はず、直に、佛國より、地理學者を招聘して、くはしく、測量せしめたるに、兩海の潮面、その高下、全く、相平均せることをたしかめたり。こゝに、遙に、これを、佛國の公議に

圖り、その助を假りて、この大業を大成せむとせり。たまたま、佛國の公議は、この事業の、ひとり、天然の困難あるのみにあらずして、更に、國際間の非常なる困難あるべきことを說きて、たやすく、この議に同せず。

一二、スエズ開鑿始末その二

レセップスは、本國の議、かくのごとくなるを聞き、奮然として起ち、遂に、一身をもて事に當らむと、決心せり。まづ、單身、土耳其にゆき、諄々として、開鑿の、必ず、着手せざるべからざるを說きて、その國議を定め、更に、

英國に赴き、反覆陳論して、遂に、その承諾を得たり。それより、諸國を歴説して、懇に、その利害得失を辨じ、猜忌の心を釋きて、協同の心をひらきたるに、いづれも、皆、賛同の意を表せり。こゝに、埃及國、その主となり、佛國、これを助け、他の諸國、また、これが捐金をなすなど、レセップスの志業は、漸く、その緒に就きぬ。

諸種の困難は、開鑿の困難といもに、レセップスの一身に纏繞し來れり。その困難とはいかに。開鑿の業、着手せられてより數年、いまだ、その成功の端緒をだに見ざれば、各國の物議は、囂然として起り、或は、その業の緩漫なるを謗り、或は、その業の不成功を議するもの、ひきもきらず。また、開鑿場にては、未開の地のならひ、器械の用意も充分ならずして、百事、みな、意の如くなること能はず。ことに、一帶の地、累々たる沙漠の原野にして、炎暑、まことに、燒くが如くなれば、場中二萬の役夫は、日夜、その厭苦を訴へてやまず。内外の攻撃は、かくのごとくにして、みな、レセップスの一身に集り、その心勞、實に、いふべからざる上に、志かも、第二の困難は起れり。そは、資金の缺乏なり。

レセップスは、この間に立ちて、すこしも、たわまず、い

よいよ、勉勵して、工事を督し、孜々として、業務をつとめたりき。されど、各國誹謗の論、ますます、その勢を得、誣罔、こもごも、起りて、また、いかにともすべからざるに至りしかば、遂に、各國に向ひて、實地を調査せむことを乞へり。各國の委員等、實地に臨みて、これを調査せしころには、土功、はや、その半を終へたりければ、流言も、これより、次第に衰へ、資金も、從ひて集り、遂に、その大成の功を見るに至れり。

はじめ、レセップスの、埃及王に建言せしより、歳月をかぞふれは、實に、十有五年、その費用を算すれば、實に、八千萬弗の多きに達せり。その事業の大なる、想ひやるべく、レセップスの苦心、また、仰ぐべきなり。（久米邦武著歐米回覽實記）

一三、ポートセッドより友人に寄する書

先便、セイロンよりの拙書、さだめて、御落手のことと、存じ候ふ。爾來、船足恙なく、アデンを過ぎ、スエスを過ぎて、昨夜ポートセッドに安着いたし候ふ。こゝは、御承知の如く、埃及の東北端にある一小市にて、地中海の入口に候へば、身は、いま、まさに、歐亞弗三洲の境界

の上に立てるにて候ふ。

多年、夢寐の間に往來せし、歐洲の地も、はや、指顧の間にせまりたれば、一行の人々、皆、勇みよろこびて、滿船、何となう、氣も浮きたちて見ゆるを、不思議や、生は、たゞ、限なき怨恨悲愁の思に、ひとり、胸のみいためり候ふ。

そは、はじめ、香港を過ぎて、清國衰弊の狀を見しに起り、中頃、印度に入りて、その亡國の跡を吊ひしに養はれ、今、また、こゝに來て、埃及國の貧弱を哀むにより、て、全く、除くべからざる、心中の苦となりはてたるに

て候ふ。

盛者必衰の習とはいひながら、はやく、五千年の昔にありて、その文化を世界に誇りたりし國の、今は、ただ、その形骸をとゞめて、尖塔堂閣の美、纔に、行客の憐を買ふに過ぎざるなど、いかにも、悽慘の事に候はずや。嗚呼、これ、國民の罪か、そもそも、天道の循環、また、いかにともすべからざる數か。これを思ひ、かれを思へば、まことに、感慨に、堪へざる次第に候ふ。

わが船の、運河を過ぎしは、日、既に、三稜洲に落ちて、夕月の影、はや、沙上にほの見ゆる頃にて候ひき。月は

白く、沙は赭く、近き丘のみ、黑く峙つ中を、一隊の土人の、駱駝に跨りて、逍遙する樣の奇なる、その寂寞荒寥の景、殆と、形狀すべからず。室に入りて、寢に就けば、玻璃窓、圓く、月光をやどし、婆娑たるその影、枕頭に往來して、終宵、眠ること能はず候ひき。

その翌日、ポートセッドに着き候ひしが、夕ぐれになりて、一葉の小舟、わが船の下に漕ぎ來れり。中には、一人の美人ありて、人々の投げ與ふる錢をば、傘にて受けとめ、胡弓に似たる、樂器を彈き候ひき。さても、その音の悲しさ、泣くが如く、恨むるが如く、はては、訴ふるが如く、心なき人々すらも、そゞろに、征衣を濕し候ひき。生は、はや、堪へかねて、いそぎ、船房に退き、ひとり、展轉の思に、一夜をあかし候ふ。

運河の光景、レセップスの偉業、その他、ゑるすべきこと、少からねど、今は、筆とるに堪へず。なにも、後便に讓り候ふ。草々。

一四、二樣の生活

わが日本人の生活は、世界の、最も、不經濟なるものなり。彼等は、自己の鄕里たる、東洋の生活をなすのみ

生燒酒

ならず、更に、他人の鄕里たる、西洋の生活をなせり。彼等の生活は、亞細亞、歐羅巴の二大洲に跨れり。彼等は、日本服二かさね三かさねを所持する外、更に、洋服をも、二かさね三かさねは、所持せざるべからず。葉卷、紙卷の煙草を燻しつゝ、更に、煙管、煙草入をもちて、刻煙草をくゆらさゞるべからず。その中産以上にありては、煉瓦の洋館と、御殿造の日本室とを、築造せざるべからず。或は、ビーフステキを食ひ、或は、刺身を食ひ、或は、ブランデーを飲み、或は、正宗を飲み、昨日は、純然たる巴里、倫敦の紳士たりしもの、今日は、飜然として、元祿時代の物持の風を裝ふなど、同一身にて、かく、歐羅巴の生活をなし、亞細亞の生活をなす人民は、古來、その例を見ざるところなり。

かくのごとく、同一身にて、二大洲の生活をなすことは、國家經濟にれいて、大關係を及さゞるを得ざるべし。經濟的眼孔を放ちて、仔細に、この二樣生活の結果を、推究する時は、その及ぶところの範圍たる、極めて、廣大なるものあるべし。かつ、近く考ふるに、わが邦、産出するところの物件、百中の九十九は、ひとり、わが邦にれいてのみ、用ゐるべきものにて、到底、外國人に

は、用ゐられ得べきものにあらざるなり。これに反して、歐米諸國を見るに、その國に產出するものは、皆、他國にも用ゐられ得べきものにて、一物として、他國に輸出すべからざるものなし。されば、歐米の諸國には、政治上の境界は、存すれど、生活上の境界は、はじめより、存せざるなり。さるに、わが日本人は、內國產物の九十九を費消して、僅に、その一を輸出し、而して、かの二樣生活の必要よりして、たほく、外國の精製品を輸入せり。輸入の超過する、また、自然の趨勢なり。

自國物產の中にて、他國に輸出し得べきものは、大かた、原料品にて、生絲、紡績、綿絲、海產物等のみなり。澤庵大根、いかに、豐作なるも、薩摩芋、いかに、多穫なるも、久留米絣、有松絞、いかに、廉價なるも、四方の海を踰ゆることは、到底、望むべからざるなり。

それ、既に、日本の生活をなして、更に、他國の生活をなす。その、極めて、不經濟にして、多く、買うて、少く、賣らざるを得ざるは、免れざることなり。而して、歐洲生活の風は、近時、長足の進歩をなし、わが邦人中、二樣の生活をなすもの、ますます、增加せむとす。經世の志あるもの、大に、考慮すべきなり。（中江篤介著一年有半）

一五、音樂と風俗

余は、古人の治道を論じて、樂に及ぶは、その何の意たるを知らざりしが、四五年前、海外に遊び、諸國の樂の異同あること、及び、その樂が、その俗に伴ふものなることを見て、はじめて、樂の、人心に關することの、大なるを悟れり。

我が邦にて、幕府極盛の頃は、音曲歌謠、蕩々として、淫靡に走れり。かの新内といひ、常盤津といひ、清元といひ、その詞、鄙猥にして、たほくは、家庭の間には奏し

得ざるものゝみなり。かつ、その聲、哀に力なく、殆ど亡國の音をなせり。かの英國の如き、かの佛國、獨國の如き、その詞の高尚なる、その聲の溫重なるにくらぶれば、その差、いかにぞや。

わが國、近來、都鄙交通の便、開けてより、淫聲の行はるゝこと、都下にとゞまらずして、ますます、廣く、地方に傳播するを見れば、多年の後、全國に影響するところ、必ず、大なるものあらむ。歌謠に、男女の情を說く、必ずしも、惡とはなさず、たゞ、その間に守るところなかるべからず。ことに、その聲調の如きは、いづこまでも、

溫重の氣を保つところなかるべからず。一々、淫靡の調に陷りて、そを、脫する能はずば、わが俗の衰頽、また、避くべからざるに至らむ。（矢野文雄著周遊雜記）

一六、都會と幼稚園

幼稚園は、最も、都會に必要なり。都會の繁榮の度の高ければ、高きにつれて、その必要の度を高む。小兒は、一家の贅疣にあらず、遠からず、一家の運命を支配するに至るべきものなれば、その小學校の門にいらざる以前といへども、誘惑物のみ多き市中に、心なき老婆、少女等と共に、流涙せしむることの非なるは、識者を待たずして、知らるべきならずや。

善良なる家庭の小兒に、不良なる傾向をもたするに至るは、大抵、心なき老婆、少女等が、そのいやしき經歷性情より發する、擧動言笑の傳染に基因し、或は、他の家の小兒に隨從せる老婆、少女等が、擧動言笑の傳染に基因するものなり。村落とは異りて、家屋櫛比せる都會のことなれば、小兒を遊戯せしむべき空地もなきまゝ、勢、老婆、少女等をして、これを負ひ、又は、これを伴ひて、戸外に逍遙せしむるに至るは、已むべから

ざる事情なり。かくて、戸外にいづれば、老婆、少女等の、或は、美しき物品を列ね示せる商家の店頭、或は、錦繪舗の店頭、小劇場の繪看板の下、或は、神祠、或は、佛寺、或は、小飲食店に走りて、同じく、小兒を負ひ、又は、伴へる他の老婆少女等と、一團をなすに至るも、また、免るべからざる事情なり。

かくのごとくして、車馬奔馳する危險の街頭、もしくは、尊嚴神聖を保ち得ざる神祠、佛寺の閑地に、惡魔の幼稚園は開かれ、下劣の談話、卑猥の唱歌、放肆なる擧動によりて、清淨無垢なる人の兒は、咒詛せられ、誘

導せられ、薫染せられ、たふとぶべき父母の美質の遺傳は、壓伏せられ、厭ふべき父母の暗點の遺傳は、發展せらるゝなり。岐路に哭泣し、染絲に悲歎せしは、古賢の事なりといへども、ひとたび、惡魔の幼稚園に臨みて、その狀を觀察せむには、誰かは、憮然として歎ぜざらむ。

小兒も、人に負はるゝ間は、なほ、珠の如く、泥土に委せらるゝあるも、幸に、これに染まず。されど、その、漸く、長じて、三歳、四歳、五歳となるに至れば、恰も、海綿の如く、何物にせよ、吸收し能ふところのものは、吸收せず

ば、已まざるものなり。今、その詳細を語ること能はざれど、予は、「德育は、智育に先だたざるべからず」との思考をもてり。特に、三歳より、就學年齢に達するまでの兒童を、惡魔の幼稚園に放ちて、不健全、不善良の雰圍氣を吸取せしむることの、非なるを知れり。

これ等の弊を去り、清淨無垢なる人の兒をして、清淨無垢なる遊戯を、相應の思慮ある人の監視の下に取らしめ、たかして、善良健全の傾をもたせつゝ、生長發達せしむるは、幼稚園の設立を除き、何の手段かあらむ。都會をして、郊外の如くならしむる能はざれば、

都會の小兒をして、郊外の小兒の如き狀態にあらしむることも、また、能はざるところなり。されば、郊外にては、別に、小兒のために、その無害安全なる遊戯場、幼稚園を設くる要なきも、都會にては、都會の、當然、具備すべき最切要の事件として、多數の幼稚園を設くべきなり。

予は、實に、大學よりは、高等學校、高等學校よりは、中學、中學よりは、小學、小學よりは、幼稚園の設置せられ、完成せらるゝを以て、教育上の急務と考ふるものなり。（幸田露伴文稿一國の首都抄錄）

一七、明日

我を無極に繫ぐものは、明日なり。十年も、百年も、千年も、萬年も、億萬年も、すべて、明日の積れるものなるを知らずや。

人生、蜉蝣のごとし。たゞし、明日の觀念は、人に、永遠の生命を與ふ。我をして、待つある宏懷をもたしむるものは、誰ぞ。克己の念、撙節の意、我をして、脚下の泥土を忘れしめ、頭上の碧旻を仰がしむるものは、誰ぞ。あゝ、我に、明日あればこそ、我は、今日にたいして、活けるな

れ。

人間の罪惡、百中の九十七八は、明日の觀念なきより生ずるなり。怠惰、驕奢、短慮、放恣、奸姪、盜賊、殺人、放火、狂酗、詐僞、諞瞞、その他、裁判官、警察吏、新聞記者等の手中に墜ち來る罪過。

「明日ありと、思ふ心の、あだ櫻、夜半に嵐の、吹かぬものかは」。これ、醉生夢死の徒に向ひて、鐵鉞を下したる警句。「朝聞道夕死可矣」の大眞理を、反面より、說明したる深語。これを以て、直に、人は、明日を思ふべからずと解するが如きは、これ、未だ、透了の一關に達せざるも

のなり。

彼、その胸中、明日あるものは、懦夫といへども、なほ、起つを知る。英雄の精神、哲學者の深趣、君子の安心、すべて、萬丈の飛瀑の如く、滾々として、落下し來る。然り、彼、既に、天河を傾け來りて、その永遠の活泉に浴したるなり。

メテルニヒは、凡俗の奸雄なり。而して、彼、なほ、曰く、「今日の大切なるは、明日の昨日たるがためなり」と。彼、曉るところありしか、あゝ、彼、曉るところありしか。（德富猪一郎著靜思餘錄）

一八、座右の銘

人の短を、いふことなかれ。己が長を、說くことなかれ。銘にいはく、

ものいへば、くちびる寒し。秋の風。

（松尾芭蕉著芭蕉文集）

一九、十七文字

芭蕉

○

傘に、わけ見たる、やなぎ哉。

夏草や、つはものどもが、夢の跡。

枯枝に、烏のとまりけり。秋の暮。

年暮れぬ。笠きて鞋、はきながら。

蕪村

○

よき人を、宿す小家や。たぼろ月。

短夜や、なみうちぎはの、すて篝。

ふら露や、茨の蕀に、ひとつづつ。

皿を踏む、鼠のれとの、夜寒かな。

二〇、國語と愛國心

わが日本國は、一家族の發達して、一人民となり、一

人民の發達して、一國民となりしものにて、神、皇、蕃別の名ありといへども、今日にては、すべて、これ等の區別は、全く、鎔化し去られたり。こは、實に、國家の一大慶事にして、一朝、事ある秋に當り、われわれ、日本國民が、協同の運動をなし得るは、主として、その忠君愛國の大和魂と、この一國一般の言語とをもてる大和民族あるによりてなり。故に、日本國民の義務として、この言語の一致と、人種の一致とをば、帝國の歴史と共に、一歩も、その方向より誤り退かしめざるやう、勉めざるべからず。かく、勉めざる者は、日本國民を愛する仁

者にあらず、また、日本帝國を守る勇者にあらざるなり。

われよそ、一人民が話す言語と、その人民の性質との間には、最も、入り組みたる關係あるものにて、その人民が、一事物に對して感じ、或は、考ふるすべての事は、皆、その言語に反射し出づるなり。故に、言語は、その話す人の精神上に生活する思想、および、感情が、外に出でて、化身したるものなりといふも、決して、不可なきなり。

試に、支那語を見よ、いかに、仁義の道が、彼等の間に行はれしかは、歴史をまたずして、言語の上に明なり。文人國に、詩歌の語、れほく、發達し、武人國に、武人の語、れほく、繁昌す。英語の、商業にれける、佛語の、社交にれける、獨逸語の、學問にれける、皆、それぞれ、その人民の長所によりて、發達したるものなり。

言語は、これを話す人民にとりては、恰も、その血液が、肉體上の同胞を示すが如く、精神上の同胞を示すものにして、これを、日本國語にて、たとへていはゞ、日本人の精神的血液なりといひつべし。日本の國體は、この精神的血液にて、主として維持せられ、日本の人

種は、この、最も、つよかるべく、最も、永く保存せらるべき、鎖のために、散亂せざるなり。故に、大難の一度來るや、この聲の響くかぎりは、四千萬の同胞は、いつにても、耳を傾くるなり。いづこまでも赴きて、飽くまでも、助くるなり。死ぬるまでも、つくすなり。志かして、一朝、慶報に接する時は、千島のはても、沖繩のはしも、一齊に、君が八千代を、こと祝ほぎたてまつるなり。

かくの如く、言語は、國體の標識となるのみにあらず、これと同時に、又、一種の教育者、所謂、なさけ深き母にてもあるなり。われわれが生るゝ、やがて、この母は、

われわれを、その膝の上に迎へ取り、懇に、この國民的思考力と、この國民的感動力とを教へ込みくるゝなり。されば、この母の慈悲は、誠に、天日の如し。苟も、この國に生れ、この國民たり、この國民の子孫たるもの、誰か、この光を仰がざるべき。

言語の上には、われわれが心中に、一日も忘れかぬる生活、ことに、人生の神世ともいひつべき、小兒のころの記念が、結びつき居るものと、知るべし。われわれが、いとけなかりし頃、終日の遊につかれはてゝ、すやすやと、眠に就かむとせしをり、その母君は、いかにや

さしき聲にて、ねよとの歌を謳ひ給ひしか。頑是なき小兒心に、わるふざけなどして、うち廻りし時、われわれの嚴しき父君は、いかにたごそかに、教訓を垂れ給ひしか。さては、隣家の垣に攀ぢて、餘念なく、栗の實を拾ひたる、或は、春のうらゝかなる野邊に、友だちと蓮華などを摘みあるきたる、すべて、當時よりつかひ來れる言語は、當時の人名、當時の地名と共に、なにともいはれぬ快感を、われわれに與ふるなり。次には、小中學校のことば、次には、學生のことば、或は、市民としてのことば、或は、職業により、階級により、地方によりて

のことば等、皆、それぞれの生活を、この上に反映す。故に、外國にて、人となりしか、或は、外國人の學校にて、外國語の教育のみを受けたる人ならざるかぎりは、この言語の恩澤を蒙り、この言語に、感謝の意を表せざるものはなかるべし。

されば、國民が、その國語を尊ぶことは、一の美德にして、偉大なる國民は、必ず、その自國語を尊び、決して、これをわきて、他の外國語を尊奉せず、情の上より、自國語を愛し、理の上より、その保護改良に從事し、以て、眞正の國民を養成せむことをつとむ。現今の獨逸の

如きは、その一好例なり。れよそ、いづれの國を問はず、苟も、國家の觀念の上より、その一員たるに愧ぢざる人物養成を以て、目的とする以上は、常に、まづ、その國の言語、次に、その國の歴史、この二つをないがしろにしては、決して、その功を收むること能はず。これ、國民たるもの、、須臾も、忘るべからざることなり。（上田萬年著國語のため）

二一、國語國文の變遷

中古、漢文の、佛法と共に、わが國に入り來りしありさまは、恰も、渴者の、水を得たるがごとく、非常の熱度をもて、歡迎せられ、漢文をもて、公私一般の用文となし、律令格式より、歴史、風土記の編纂、裁判の宣告、官吏の請暇、下は、租稅の帳簿、貸借の證文にいたるまで、すべて、皆、不十分ながらも、漢文を用ゐしめたり。この時の人の思想には、その語源、語法をことにしたる漢文と國語とは、遂に、相合一すべからざることを思はざりしか、或は、また、漢文、漢語を用ゐて、わが固有の國語を撲滅せむとの企なりしか、今より、測り知るべからざれども、とにかく、一國の國民としては、一國の命運

と共に、固有の國語を愛重すべきことを、忘れたりしがごとし。固有の國語を撲滅するは、事情のゆるさゞるところにして、當時、實際のありさまは、漢文は、ひとり、博士、學士の間にれこなはれ、僧侶にれこなはれ、國民の一部にれこなはれしにとゞまり、政事上の公文、および、政府編纂の歴史は、形式の美觀にとゞまりて、一般の國民にとりては、到底、その耳目に熟すべくもあらず、かへりて、文武離隔、朝野蔽塞、大政振はざる原因とはなりしなり。

かくのごとく、學世、迷霧の中にありしも、幸に、豪傑

の士ありて、音韻、および、假名の用法を發明し、これを、通俗に用ゐ、また、和歌に用ゐ、國語と相密着して、自在に、使用するを得しめ、その後、また、一歩を進めて、漢字まじりに活用し、國語を經とし、漢字を緯とし、國語を主とし、漢字を客として、さらに、一層の便利を感ぜしめたり。

假名の使用は、一般に、便利を感ぜしめたるにかゝはらず、また、その使用法の、更に、一歩を進めて、漢字まじりの物語體となり、いよいよ、便利を加へたるにかかはらず、當時にありては、なほ、女文といはれて、朝廷

の公文に用ゐられざりしのみならず、鎌倉の武力第一の時にれいてすら、政府の記錄、および、裁判申渡は、拙劣なる文章生、または、僧侶の手を假りて、鵺のごとき漢文を用ゐたりき。德川氏にいたりては、いかに。林道春は、東照公の命を奉じて、信長譜、秀吉譜を編述せしに、なほ、漢文を用ゐたり。余が、尤も、惜むところのものは、水戸義公の大日本史を編纂せらるゝにあたり、三宅觀瀾のごときは、國文を用ゐむとの議を建てしも、當時、多數の勢に制せられて、遂に、漢文を用ゐるにいたりしことにして、氣運の、いまだ、いたらざりきとはいへ、遺憾のことなり。思ふに、幕政三百年の間、文人、彬々輩出して、漢文の著述、すくなからざりしも、帆足萬里は、猿の狂言なる一語をもて、これを冷遇したるにあらずや。

もし、德川氏のはじめに當りて、一の豪傑ありて、漢文の、遂に、國語と一致すべからざるを知りて、國文の體を一定し、公文に、歷史に、教育に、これを用ゐしめたらむには、その間に生れたる俊才の士は、青年の精神氣力を、佶倔艱難なる漢文の修業に用ゐずして、他の有用なる事業に用ゐ、三百年の文運は、駸々として、一

層、高度の進歩に達したりしならむ。要するに、わが國民が、國文、國語にたける、固有の特性は、長き年月の間、一種の事情のために、發達を妨げられつゝ、經過したりしは、歴史の證明する事實なり。（井上毅著梧陰存稿）

二二、　德川光圀

水戸中納言光圀卿は、頼房卿の第三の子、東照宮の御孫なり。寛永の十年、威公の嗣、いまだ、定らざりしかば、大猷院殿の仰にて、中山備前守信吉、水戸に至り、光圀卿三つに成り給ひしを見て、かへりごとせしが、やがて、嗣に定りぬ。正保二年、史記の伯夷傳を讀みて、深く、感ずるところあり。嗣は、兄頼重立ち給ふべき事なるに、かく、定りつれば、その子に、家を讓らむ志、この時より起させ給へり。

卿は、學問を好み給ふ志篤く、明暦三年より、大日本史を撰びはじめらる。神功皇后の帝紀にありしを、后紀に入れ、大友皇子を、天子と定め、南朝を、正統と立てられしは、皆、この君の義烈なり。寛文三年、頼房卿、卒去あり。僧家の法を用ゐず、瑞龍山に葬り、威公と謚し、廟を、水戸の城中に建てられ、祭祀の儀式を定め給ふ。こ

の時、殉死せむとする士ありしが、君、自ら、その家にゆきて、止めらる。この事、上に聞えて、殉死は、天下一般停止の旨、仰せいださるゝにいたれり。

卿は、兄賴重卿の子、松千代綱方を、志ひて、養嗣とせむ事を乞はれたり。この事、もし、聞き入れられずば、世を遯れむ志なりしに、賴重も、許諾ありしかば、卿は、松千代の弟、采女綱條をも引きとりて、養ひ給へり。時に、明朝の遺民、朱之瑜といひて、文學ある者、清朝の粟を食まじとて、日本に渡りしを、筑後柳川の文學、安東省庵、その俸祿の半を分ちて、養ひたきしが、卿は、これを

召して、師となし給へり。

綱方、病によりて、卒去せしが、弟綱條を養ひたかれし故、やがて、世嗣になし給ひぬ。延寶元年、孔子の堂を、水戸に建て給はむため、江戸駒込の屋敷に、かりの設をなし給ひぬ。また、日本古來の假字の文章を編みて、三十卷となしゝが、このことと、天聽に達して、後西院天皇より、その書の名を、扶桑拾葉集と賜はりぬ。

天和二年、朝鮮の使臣、江戸に來れり。然るに、その進物の目錄、禮儀を失ひたりしかば、卿、これを責めて、三條の質問ありしに、使臣答ふる詞なかりきとなり。後

西院天皇の勅命により、鳳足といふ御硯に、銘を作られしかば、宸筆を下し給ひて、賞美せさせ給ふ。その御詞の中に、「備武兼文絶代名士」と、いへる句ありしを、印に彫せられきとなり。

元祿三年、領國を、綱條卿にゆづり給ひ、權中納言に任ぜられたりしが、ほどなく、辭表を奉らる。

位山、のぼるもくるし。老の身は、
ふもとの里ぞ、すみよかりける。

常陸の久慈郡太田鄕の西山に引き籠りたまふ。山莊のありさま、萱をもて葺き、門垣には、蔦はひかゝり、竹

がき一重めぐらして、池に、蓮を植ゑ、西山のほとりに、桃、數百株うゑて、川の流の橋を、桃源橋と名づけ、鹿をはなち、鶴をかはせ給ふ。瑞龍山に、壽藏を設け、衣冠を埋め、みづから、碑陰の銘を作り給へり。

久慈郡、小野平村の旌櫻寺に、祠堂をたて、賴義、義家の神靈を祀らる。また、攝津の湊川に、楠木正成の墓を修し、碑をたて、面に、「嗚呼忠臣楠子之墓」と、自筆し、陰には、舜水の撰びたる讃を彫らせらる。又、舜水の碑を、瑞龍山にたてられ、その文集をあみて、門人源光圀と稱し給へり。彰考館を作りては、和漢の群書をあつめら

れ、遠國他鄕に學士を遣し、半紙一行の反古をも、見るに隨ひ、拾ひ收め給ひけるほどに、色々の書ども、編集ありけり。中にも、禮儀類典五百卷は、日本古來の寶典とも稱しつべきなり。

寛文五年、領國中の淫祠、三千八百をこぼちすて、新地の寺院、九百九十七を除かる。地の利をつくす術に、心を盡され、山には、漆、楮を、ゑほく、植ゑ、野には、馬を放ちて、牧となし給へり。また、海參、白魚、昆布を、干沼浦にまき、蛤を、海にはなち給へり。この地、これより、海產、れほく、出づ。元祿十三年、西山にて逝去あり。義公と謚せ

り。（湯淺常山著常山紀談）

二三、文貞公の事蹟

贈太政大臣藤原師賢公は、花山院內大臣師信公の男にして、最も、學問に志あつくれはせしかば、後醍醐天皇、ことに、寵遇し給ひ、正二位大納言にせられたり。元弘元年八月、主上、笠置に行幸し給へる時、叡山の衆徒の心を計らむため、公に、袞龍の御衣をたまはり、行幸の體に擬して、この山に登らせ給ひしに、思ふに違へる事情となりければ、夜半に忍びて、京へれもむか

せ給ふ。途中、志賀の浦を過ぎ給ひ、有明の月の、くまなきを見給ひて、

思ふ事、なくてぞ見ましほのぼのと、
ありあけの月の、志賀のうらなみ。

その後、笠置の行宮へまゐりて、供奉し給ひしに、皇軍敗るゝに及びて、主上は、公と、藤房、具行の兩卿とを御供にて、風雨のはげしきに、嶮岨の山路をたどらせ給ひける時、暗夜にして、主上を見うしなひまゐらせしかば、はからずも、京へかへりて、所々に忍び給ひけるほど、君をれもふ情に堪へず、

思ひかね、入りにし山を、たちいでて、
まよふうき世も、たゞ君のため。

遂に、とらはれとなり給ひて、翌二年五月、下總國に流さるべきに定りて、下りたまふ道すがら、をりにふれたる御歌ども、たほかる中に、

別るとも、なにか歎かむ。君すまで、
うきふる里と、なれるみやこを、

海山を、見るそらもなし。わが心、
さながら君に、そへて來ぬれば、

これ、公の悲憤慷慨の情、たのづから、現れたるものな

れば、殊に、掲げ出せり。

その年の十月、御病にふし給ひ、二十九日に薨じ給ひき。御歳三十二なり。翌年、主上、花洛に行幸ありて、公家一統の御代となりしかば、太政大臣を贈られ、かつ、文貞公と諡を賜ひて、その靈魂を慰め給ひき。思ふに、こは、公の配所中に薨じ給へるを憐み給ふのみならず、記錄に漏れたる忠績の遺事、なほ、多かりけむによりてのことなるべし。

さて、公の薨後、四百餘年にして、配所の地、及び、墳墓等は、正しく、香取郡名古屋村の小御門なる事を發見し、その地の人、心を協せて、社地を購ひ、神殿を造りつるが、朝廷よりは、特旨の賜金、また、靈璽の御劒を下し賜ひて、遂に、明治五年、別格官幣社に列せられたり。あはれ、生きては、王事に勤勞せられ、死にては、國家の鎭護となられしなど、その御德のほど、なにゝかたとへむ。小御門の神威、赫々として、世人の敬慕をうけ給ふも、げに、うべなる事にこそ。（小中村清矩文稿抄錄）

二四、武將の文事

太田持資は、上杉の家老なり。鷹狩に出でて、雨に逢

ひ、百姓の家に入りて、「簑を貸し給へ」と、いひ入れしに、若き女、ものは、なにともいはで、山吹の花、一枝折りていだしければ、「花をくれよといふにあらず」とて、腹立ちて歸られしに、これを聞きし人の、「それは、

七重八重、花はさけども、山吹の、
みのひとつだに、なきぞかなしき。

と、いへる古歌の心にて、簑なしと申す事を、いはで知らせ申したるなり」と、申しければ、持資驚きて、われ、かほどの事をだに知らず、百姓の娘にも劣れること、口惜しとて、それより、書をよみ、歌に志をよせられたり。

下總國へ軍を出す時、「敵、山涯の海邊に、山上より石弓を張りたり。潮、湛へたらば、通り難かるべし。いかに」と、いひしものありしが、折節、夜半なるに、持資、「いざ、見て來む」とて、馬を乘りいだしけるが、そのまゝ歸り、「潮は干たり」とて、軍を、わし通されけり。これは、

遠くなり、近くなるみの、濱千鳥、
なく音にぞほの、滿干をぞ知る。

と、よめる歌あり。それを思ひいだして、千鳥の聲、遠く聞えたれば、潮の干たるを知りたりとなり。又、のき口に、利根川を渡す時、これも、夜半にて、「暗さは暗し、いづ

こか淺瀨なるべき」と、口々にいひけるに、持資、「古歌に、

そこひなき淵やはさわぐ。山川の、
あさき瀨にこそ、あだ波はたて。

と、よめり。波の荒き處を渡せ」と、下知して、難なく、淺瀨を渡りけりとなり。（湯淺常山著常山紀談）

二五、夏夜（清水濱臣詠）

くもまのつきも、　やどるなり、
くひなのこゑも、　たきるなり、
たちばなかをる、　夕かぜに、

岩もるゐみづ、　すゞしくて。

二六、鹽原

車は馳せ、景は移り、境は轉じ、客は改れど、われは、やすからざる悒鬱を抱きて、やる方なき五時間のひとりに倦みつかれつゝ、はじめて、西那須野の驛に下車せり。直に、西北に向ひて、今、なほ、茫々たる古の那須野原に入れば、天は濶く、地は遐に、たゞ、平蕪迷ひ、斷雲飛ぶのみにして、三里の坦途、一帶の重巒、鹽原は、そこぞと見えて、行くほどに、路は、窮らず。漸く千本松を過ぎ、

進みて、關谷村にいたれば、人家のつくるところに、淙の響ありて、これに、かゝれるを、入勝橋となす。

橋を渡りて、僅に行けば、日光暗く、山、厚く疊み、嵐氣冷に、壑、深く陷りて、いくめぐりせる葛折の、後には、密樹、聲々の鳥呼び、前には、幽草、歩々の花を發き、愈、登れば、遙に、木がくれの音のみ聞えし、流の水上は、淺くあらはれて、すはや、こゝに、空山の雷、白光を放ちて、頽れ落ちたるかと、すさまじかり。道の右は、山を剸りて、長壁となし、石、幽に、蘚、碧にして、幾條ともなく、白絲を亂し懸けたる細瀧小瀧の、珊々として灑げるは、嶺上の

松の調も、さだめて、この緒よりやと、見捨て難し。

車を驅りて、白羽坂を踰えてより、回顧橋に、三十尺の飛瀑をふみて、山中の景は、はじめて、奇なり。これより行きて、道あれば、水あり。水あれば、必ず、橋あり。全徑にして、三十橋。山あれば、巖あり。巖あれば、必ず、瀑あり。全嶺にして、七十瀑。地あれば、泉あり。泉あれば、必ず、熱湯あり。全村にして、四十五湯。なほ、數ふれば、十二勝、十六名所、七不思議、一々、探り得べくもあらず。

そもそも、鹽原の地形たる、鹽谷郡の南より、群峯の間を分けて、深く、西北に入り、綿々として、箒川の流に

泝る片そばの、四里に岐れ、十一里に亘りて、いたる處、巉巖の水を夾まざるなきは、宛然、青銅の藥研に、瑠璃末を碎くに似たり。先づ、大綱の湯を過ぐれば、根本山、魚止瀧、兒が淵、左靱の險は古りて、白雲洞は朗に、布瀧、龍が鼻、材木石、五色石、船岩など眺め行けば、鳥居戸、前山の翠、衣に染みて、福渡の里に入るなり。

一村十二戸、溫泉は、五個處に涌きて、五軒の宿あり。こゝに、清琴樓と呼べるは、南に方りて、箒川のゆるくめぐる磧に臨み、俯しては、水石の粼々たるを弄び、仰げば、西に、富士、喜十六の翠巒と對して、清風、座に滿ち、袖の澤を落ちくる流は、二十丈の絶壁に懸りて、素練を垂れたる如き吉井瀧あり。東北は、山また山を重ねて、琅玕の玉簾深く、一望の下、丘壑の富を擅にし、林泉の奢を窮めらるゝなど、又、あるまじき別境なり。

われは、この繪を看る如き、清穩の風景にあひて、かの途上、險しき巖と、峻しき流とのために、幾度か、魂飛び、肉消して、理むる方なく、かき亂されし胸の内は、茫然として、頓に、和ぎ、恍然として、總て、忘れたり。

まことに、よくこそ、われは來つれ。何ぞ、來ることの、甚だ、遲かりし。山の麗しといふも、壤の堆きものゝみ、

川の暢けしといふも、水の逝くに過ぎざるを、牢として、拔くべからざる、わが半生の痼疾は、いかで、壤と水との醫すべきものならむと、齒牙にもかけず、侮りたりしれのれこそ、先づ、侮らるべき愚のものなれや。

見よ、見よ、木々の緑も、浮べる雲も、秀づる嶺も、流るる溪も、峙つ巖も、吹き來る風も、日の光も、鷄の啼く音も、空の色も、みなれのづから、浮世のものならで、われは、こゝに、憂を忘れ、悲を忘れ、苦を忘れ、勞を忘れて、身は、かの雲と輕く、心は、この水と淡し。希くは、今より、かくの如くして、わが生を終らむかな。

思もあらず、怨もあらず、金錢もあらず、權勢もあらず、名譽もあらず、野心もあらず、榮達もあらず、墮落もあらず、競爭もあらず、執着もあらず、得意もあらず、失望もあらず、たゞ、天然の無垢にして、形骸の安きのみなるこの里、わが思を埋むる里か。わが骨を埋むる里か。（尾崎紅葉文稿抄錄）

二七、ナイヤガラ瀑布の記

ナイヤガラ瀑布は、世界中の、最も、大なる瀑布にして、雄偉壯快、遙に、人の意表に出で、白虹飛龍の比喩も、

その、眞景の萬分一を形容すること能はざるなり。故に、歐亞の文士、詩人、續々、杖を、こゝに曳けども、みな、筆を抛ち、稿を裂き、いまだ、嘗て、人口に膾炙すべき佳句妙文を、寫しいだしたるものなしとぞ。

この瀑布は、合衆國と北米英領との疆界の一分をなす五大湖の四と、シントクリヤ湖との水の流れ來て、注下するものにして、その五湖の面積を合計すれば、概算、八萬五千九百六十方英里の廣さに達せり。日本本島の面積より小なること、纔に、一萬四千餘方英里なるのみ。そのシユーペリオル湖は、面積、二萬八千六百方英里にして、世界中、淡水湖の、最も、大なるものなり。五十の川流、これに注ぎ、位置、最も、西にありて、瀑布を距ること、きはめて、遠し。次は、ミシガン湖、無數の小河を容れ、面積、二萬千方英里、わが北海道より大なること、一千方英里なり。次は、ヒユーロン湖、面積、一萬九千方英里、わが九州より大なること、三千方英里、湖中の島嶼、その數、實に、三萬二千あり。次は、シントクリヤ湖なり。こは、上の三湖にくらぶれば、きはめて、小に、面積、纔に、三百六十方英里にすぎざれど、たもしろき島嶼、ほく、名ある川河の、これに注ぐもの、數を知ら

ず。この水下りて、イリイ湖となる。これを、第四湖とな
す。面積、一萬三千方英里にして、わが四國より大なる
こと、二千方英里なり。デトロイト河、これに注ぐ。この
湖の東端、ナイヤガラ邑の近傍にいたりて、グランド、
アイランドと稱ふる一島に遮られ、わかれて、兩派と
なる。瀑布に近づく前は、河幅せまく、地勢傾きて、流も、
急なるが、忽ち、地勢の甚しき高低にあひて、直下する
もの、これ、この瀑布なり。瀑布より、下、十四英里にして、
五大湖の一なるオンタリオ湖に入り、終に、出でて、セ
ントローレンスとなり、太西洋に注ぐ。

さて、瀑布○左にあるものは、彎曲して、その狀、馬蹄
に似たれば、馬蹄瀑の名あり。右にあるものは、アメリ
カン瀑といふ。蓋し、その合衆國の境内にあるがため
ならむ。左瀑は、幅、六百碼にして、高さ、百五十呎、右瀑は、
幅、二百碼にして、高さ、百六十四呎なり。算家の言によ
れば、兩瀑、注下の水量、一分時間に、一億噸のわほきに
いたるとかや。故に、その響、萬雷の吼ゆるがごとく、大
地も、これがために震動し、近傍數百歩の地にある家
屋にては、盤水、常に、波紋を生ずといふ。

余が、この地に遊びしは、六月の下旬なり。氷柱の相

集りて、玉山銀臺を造るが如き、絶景を見る能はざるも、晝は、飛沫の中に、紅霓の七彩をあらはすを見、夜は、圓月の朦朧として、瀑上にのぼるを見たり。ことに、余が宿れる絶景館は、馬蹄瀑の近傍にして、兩瀑の全景を專にせり。一たび、樓上の硝窓をひらけば、飛沫、忽ち、衣を濡し、凉氣、膚を侵して、更に、時季の夏なるを覺えざるなり。樓を下れば、兩岸、絶景の地に、邑民、あるは、飛橋を架し、あるは、螺階を設けて、人々の眺望に備へたり。余も、また、この螺階を下りて、斷岸の底にいたり、仰ぎて、大瀑の注下するを見しに、足ふるひ、魂わどろきて、心に感ずるところあるも、口、これをいふこと能はず。ともかく、この瀑布の雄偉壯快は、余のごとき拙筆の、よく、ゑるし得べきところにあらず。かの漢土にて、詩仙といはるゝ李太白をして、この世に生れしめて、この瀑布をのぞましめば、「疑是銀河落九天」の句は、廬山に發せずして、必ずや、こゝに、發せしならむ。（小幡篤次郎文稿今體名家文鈔抄錄）

二八、コロンブス　その一

クリストハァ―コロンブスは、ゼノアの漁父の子な

りき。幼時より、魁偉にして、その敢爲の氣象は、はかなき遊戯のうちにもあらはれたりとぞ。稍、長ぜし頃、たまたま、その國人と、フェニシヤ人との間に、爭亂起り、本國の艦隊、續々、出征せしかば、彼は、みづから乞うて、從軍せり。はげしき砲戰の後、彼の乘れりし艦は、敵の砲火のために、あはや、沈沒の不幸を見むとするにいたりしが、大膽なる彼は、忽ち、身を挺して、激浪の中に投じ、遂に、よく、海岸に達して、その名を、國民の間に、あらはせり。

當時、新世界發見の理想は、全歐洲の人心を支配して、人々、みな、あらぬ妄想の夢に耽れり。コロンブスも、また、この夢こゝちに驅られて、深く、新世界發見の望を、わが胸中にきざみ、やがて、鄕關をあとにして、葡萄牙に赴きぬ。こは、葡萄牙の海運、當時、世界第一と稱せられて、航海者の精鋭、みな、この國に集りたればなり。首府リサボンにて、ある有名なる航海者の一女と結婚せしが、その家には、精細なる地圖もあり、精巧なる器械もありければ、彼は、寢食を忘れて、ひたすら、その研究に從事せり。

かゝる間に、一種の信念は、その心中に起りぬ。そは、

印度に至るべき航路の、亞非利加を迂回せむよりは、遙に、近き道あるべしとの信念なり。初は、たゞ、雲の如く、烟の如く、ぼろげに、その胸中に浮びたりしが、かく、思ひさだむと共に、種々の材料あらはれ來りて、益、彼の信念をたしかめたり。ある航海者は、「二回まで、めづらしき彫刻ある木の、流れ來れるを見たり」と、いひ、また、ある人は、「皮膚骨格の、歐洲人とは異れる死屍の、西より流れ來て、アゾールの港の方に漂ひ行きしを見たり」と、いへり。そを聞くまゝに、彼は、新航海の發見をなし遂げむとの念、燃ゆるが如く、今は、まことに、抑へむとするも、抑ふること能はずなりぬ。されど、資力なき一私人の、到底、企て及ぶべき事ならねば、いかにもして、政府の助を得むものをと、彼は、輾轉反側の間に、うらめしき月日を送れり。

コロンブスは、遂に、意を決して、葡萄牙王ジョン第二世に謁を乞ひ、まのあたり、熱心に、わが企圖を聞えまつりぬ。王は、心の中に、その說を信じ給ひしかど、陽には、少しも、感ぜぬさまを裝ひて、空しく、その願を斥け給ひ、潛に、わが臣下に命じて、數隻の船を艤して、西方へ向はしめ給へり。されど、それらの船は、いくほど

もなく、かへり來て、その望の、あだなることを、復命しぬ。

コロンブス、これを、漏れ聞きて、深く、葡王の信なきを恨み、去りて、西班牙にゆき、國王フェルヂナンド、及び、皇后イサベラの兩主に謁して、その企をきこえ上げぬ。彼のことばは、容易に、國王の心を動すこと能はで、彼は、こゝに、八年の、長き苦しき生活を送りぬ。あらゆる辛酸を嘗めつくして、なほも、撓まぬ彼の決心は、遂に、國王の心を惹きたらむ、グラナダ征戰の終りし後、イサベラ皇后は、彼に、三隻の小艦を與へて、萬般の用意をなさしめ給ひぬ。

二九、コロンブス　その二

一千四百九十二年八月三日、コロンブスは、三隻の小艦と、百二十人の部下とをひきゐて、プァロスの港より船出して、カナリー群島に寄港し、こゝにて、飲水を蓄へ、勇み進みて、はてなき航海の程に上れり。一望、きはみなき海面の、水と空との界に、ぼつかなくも、月日の過ぎ行くまゝに、はやくも、不平の聲は、水夫の間に起りぬ。始のほどこそ、いかにもして、慰めたれ、終に

は、望郷の念に、え堪へぬ人々の恨、彼の一身に集れり。彼は、巧に、これを慰めすかして、そを勵したれど、諸種のあやしき現象、つぎつぎに、起りきて、益、水夫どもの勇氣を奪ひぬ。はてなき海草、波の上を埋めて、牧場かとあやしまるゝばかりなるに、はては、船足、鈍りて、進むこと能はず。人々は、いかになりゆくにかと、安き心もなく、「嗚呼、われらは、このれそろしき藻屑の中に葬られ終らむとす」と、うちかこつものさへあり。されど、いつか、望の光は、見えそめぬ。海は、漸く、淺くなりて、蘆の葉、木の枝など、そこゝに浮び、陸鳥の、檣の上に飛び來て、群れ戯るゝを見るにいたりぬ。

けふの日は、沈みぬ。なほ、何物も、眼には入らず。されど、コロンブスは、水夫に命じて、帆を卷かしめたり。こは、船の夜中に進みて、暗礁に乘り上げむことをれそれたればなり。やがて、夜は、あけはなれぬ。これ、十月十二日なり。午後に至りて、陸は、天の一方に見えそめぬ。「陸見ゆ、陸見ゆ」との聲は、不意に、檣樓より、響き渡れり。やがて、一發の砲聲は、水天に轟きぬ。後れたる他の二隻の船に向ひて、この發見を報ぜしなり。いつか、また、日もくれぬ。人々、船房に集りて、明日の日を待ち詫ぶ

るに、喜極りて、眠られず。さるほどに、東天、いつか、白みそめぬ。鮮なる日輪は、のぼりぬ。緑滴らむばかりなる島は、旭の光に輝きつゝ、人々の目前に横りぬ。全艦、殆ど、狂せむとぞたりしが、やがて、いさましき樂隊の唱歌は、起れり。國を出でてより、實に、七十一日、その辛苦、また、いかなりけむ。

左手に、旗を取り、右手に、劒を提げて、コロンブスは、先づ、第一に、上陸せり。岸には、一群の蠻民集り居しが、驚のあまり、ことばなくて、佇立せり。げに、彼等の驚きしも、無理ならじ。かゝる人、かゝる船、彼等の、夢にだも、想ひ見ざりしところなるべければなり。彼等は、たゞ、天上の神達の下り來ましたるにやと思へり。さて、その蠻人のさまを見るに、身には、まとふべき衣なく、色は、飽くまで黑く、鼻と耳とには、黃金の光まばゆきばかりなるを、さしはさみたるさま、異樣といはむにも、ことば足らず。かくて、島の名も、さだかならねば、コロンブスは、新に、その名を、サンサルバードルとつけぬ。助の島といふ義なりとぞ。こは、これ、現代のバハマ島の一部分なり。人々は、ガラス、珊瑚の類を、蠻人に與へしに、彼等は、多額の金をさゝげて、敬意を表せり。

かくて、この月の二十七日には、キューバ島を發見し、次で、十一月三日には、ハイチー島をも發見せり。いたるところ、緑林茂草、蓊鬱として、その地味、また、膏腴なり。一行は、また、こゝにて、喫烟の習慣を發見せり。この習慣は、こゝより傳りて、全世界にひろまれるにて、こゝの土人は、これを呼びて、タバコスといへりしより、タバコの名は、起れりとかや。

三〇、コロンブス　その三

今や、コロンブスは、歸心、矢の如し。歸りて、國王に、この發見を報告せむとの念は、日一日と長じ來ぬ。かつ、彼の伴ひし船の、一隻は、破れ、一隻は、また、行方も知らずなりしかば、かばかりの小勢にて、この上の發見をつゞけむこと、難かるべしと思ひぬ。こゝに、彼は、その破れたる船の材をもて、一小砦を築き、その守備として、三十六人の水夫を殘しおき、一千四百九十三年一月四日をもて、遂に、歸航の程に上れり。

歸途、海上、風浪、おきりに、荒れて、船の沈沒せむとせしこと、幾たびなりしかを知らず。その、最も、烈しかりし折は、コロンブスも、はや、覺悟せしが、たゞ、この發見

の、世に知られで、やまむは、いかにも口惜しとて、羊皮の上に、事の由をかきつけ、堅く、箱の中に密閉して、これを、海中に投じ、そのいつこかの海岸に、漂着せむことを祈れり。されど、風浪、いつか靜り、船足、恙なく、三月十五日をもて、プロスの港に、安着せり。

祝砲は、かなたの砲臺より、響きはじめぬ。寺々の鐘の聲、群集歡呼の聲、互に、相和して、暫時、やまず。コロンブスは、靜に、上陸して、直に、バルセロナの王宮に向ひぬ。その後には、新世界より齎し歸れる、さまざまの寶を積み重ねたる車、あまた從へり。そを見むとて、寄りくる市民のごよみは、いかに、恐らくは、將軍凱旋の式も、これには、過ぎじと思はれたり。國王は、親しく、彼を玉座に引接し給ひて、忝なき稱賛の言葉をかけ給ひしが、これより、コロンブスの盛名は、まことに、冲天の勢をもて、西班牙全國に響き渡り、はては、歐洲全土に響き渡れり。

中等國語讀本卷五 終

明治三十四年十一月十五日印刷
明治三十四年十一月十九日發行
明治三十五年二月四日訂正再版印刷
明治三十五年二月七日訂正再版發行
明治三十六年一月二十日二十版發行

定價表
一、二、三、四每冊貳拾貳錢
五、六、七、八、九、十每冊貳拾四錢

著者　東京市本郷區駒込淺嘉町七十八番地　落合直文
發行者　東京市神田區錦町二丁目十番地　三樹一平
印刷者　東京市神田區錦町三丁目二十五番地　新井豐造
印刷所　東京市神田區錦町三丁目二十五番地　明治印刷所

明治三十五年二月十四日
中學校用文部省檢定濟

不許複製

發行所　東京市神田區錦町二丁目（特電話本局二四三八番）　明治書院
關西專賣　大阪市東區備後町四丁目（特電話東二四八番）　吉岡平助

君海在藝州東歸
負山臨海風景奇麗
氣候宜和稍有酸絶
地廣人稀市街頗整
人口七千
長崎有兵爾集郡役所醫家所等